
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.132

January 2024

九大での 2023 年度大会 ハイブリッド形式で活発な議論



(大会二日目の様子)

【2023 年度ロシア史研究会総会について】

2023 年度大会は、10 月 28－29 日に、九州大学伊都キャンパスにおいて、オンラインを併用するハイブリッド形式で開催されました。共通論題 A で一時、通信が途切れたり、2 日目の B 会場でパソコンのトラブルにより報告の開始が遅れたりするなどのトラブルがあったものの、それ以外は大きな問題なく閉幕することができました。みなさまのご協力に心より御礼申し上げます。

総会は、会場出席者が 36 名、オンライン出席者が 5 名、このほか 53 通の委任状(うち委任するもの 52 通)がありました。10 月 28 日現在の会員数は 232 名で、規約第 4 条では、会員総数の 5 分の 1 の出席で総会が成立すると定めておりますので、定足数を満たしました。

冒頭で中嶋毅会員を議長に選出した後に、選挙管理委員長の熊倉委員より、委員選挙の結果が報告されました。続いて、藤澤委員が会計報告を行い、会計監事の塩川申明会員・豊川浩一会員による監査報告とあわせて承認されました。その後、2023/24 年度の予算案が承認されました。塩川申明会員から、本年は、長らく黒字が続いていた本会会計が、赤字基調に転換する年として重要だという意見が出されました。

その後、会員数報告が名簿担当(伊賀上委員)よりなされ、つづいてニューズレター担当(松本委員)、例会担当(青島委員)、会誌担当(田中委員)から、それぞれの業務について報告がありました。

続いて、事務局(濱本)より、大会パネル参加者の会員資格について、委員会での審議で、これまでどおり会員企画による大会パネルへの非会員の参加を可とすることが決定されたという報告がありました。また、名簿非記載事項についての説明文を付した新しい入会申込書をウェブサイトに掲載したこと、日本学術会議の在り方をめぐるロシア史研究会有志声明が発出されたことが報告されました。

このうち、委員・JCREES サマースクール講師の出張宿泊費上限の 13000 円への引き上げ、委員の経費精算時の 3000 円以下の証憑書類についてデジタル画像のみでの精算を認める件、銀行口座管理代表者を会計委員にするために、会計担当委員に関係書類作成を許可する件が審議され、いずれも承認されました。

次に、池本委員長より、佐々木照央元委員長のご逝去について報告があったあと、「内閣府「日本学術会議の在り方についての方針」(令和四年十二月六日)の撤回(再考)を求める声明」(日歴協)に学会ないし委員会として賛同しなかったことが説明され、さらに、JCREES の活動について報告がありました。

審議事項であるハラスメント防止ガイドライン案については、会員より修正の提案があり、それに沿って修正したガイドラインを、決定前に改めて会員メーリングリストで提示することとなりました。また、JCREES に二人の代表を出す体制の継続が提案され、承認されました。

2022/23 年度ロシア史研究会会計報告

収 入 の 部			
	2022/23 年度予算	2022/23 年度決算	2023/24 年度予算
前年度繰越金	9,306,844	9,306,844	9,841,391
一般会員会費	1,152,260	1,284,000 1)	1,130,000 7)
雑誌会員会費	64,500	72,000	66,000 8)
雑誌売上	69,600	59,400	76,200
広告収入	200,000	140,000	120,000
利子等	20	21	20
当年度の収入総計	1,486,380	1,555,421	1,392,220
収入総計	10,793,224	10,862,265	11,233,611
支 出 の 部			
	2022/23 年度予算	2022/23 年度決算	2023/24 年度予算
ニューズレター	10,000	5,307 2)	10,000
雑誌	1,100,000	512,130	1,800,000
名簿	80,000	92,824	180,000
例会	30,000	0	30,000
会計	5,000	11,790 3)	5,000
事務局	100,000	56,034 4)	100,000
地方委員旅費	0	0	0
各種会費	60,000	60,000	30,000
大会関連費	200,000	274,921 5)	200,000
その他	50,000	7,868 6)	120,000
当年度の支出総計	1,635,000	1,020,874	2,475,000
次年度繰越金	9,158,224	9,841,391	8,758,611
支出総計	10,793,224	10,862,265	11,233,611

1) A 会員 113 名（うち委員割引 14、家族割引 1、休会中 2）、B 会員 128 名（うち委員割引 1、家族割引 5、休会中 1）。2022/23 年度会費納入率 91.7%（長期滞納者は含めず）。追納分 84,000 円。前納分 72,000 円。

2) 総合通帳の支出 9,135 円から過年度分 3,828 円を差し引いた金額 5,307 円を計上。

3) 総合通帳の支出 6,370 円に振替口座の支出 2,200 円+3,220 円を合計したもの。

4) 事務局支出 55,478 円に切手代 556 円を足したもの。

5) 大会関連収入 14,500 円（内訳：非会員大会参加費 4,500 円、祝い金（ナウカ）10,000 円）、大会関連支出 289,421 円（内訳：会場使用料 161,272 円、大会アルバイト代 55,800 円、非会員報告謝礼 30,000 円、委員・アルバイト弁当代 25,284 円、託児所補助 8,780 円、懇親会場キャンセル費 8,285 円）。

6) 振込手数料 4,040 円に過年度分の支払い 3,828 円を足したもの。

7) 本年度一般会員年会費請求予定額 1,298,000 円（2023 年 9 月末時点）を納入率 90%で計算し、そこから前納分を引き、さらに追納分を 50%回収として計算。

8) 現在の会員数×2 号分から、前納分を引いた値。

通帳等残高	2022年8月31日	2023年8月31日	内訳・備考
ゆうちょ銀行定額貯金口座	0	0	すべて2021年9月7日に満期、ゆうちょ総合口座へ移管済み。
ゆうちょ銀行通常貯金口座	2,330,666	4,165,058	2022年8月31日時点の口座上の残高は2,248,449円だが、2022年10月大会の懇親会費81,400円は当該年度の支出として計上せず、逆に過払金817円の返金分(2022年9月28日)を加えて、2,330,666円とした。
ゆうちょ銀行振替口座	6,974,543	5,631,838	
みずほ銀行振替口座	0	0	
現金	0	43,416	8月31日時点では43,416円を現金で保管していたが、会計監査のために9月20日、22日に総合口座に入金。
事務局切手	1,635	1,079	
総計	9,306,844	9,841,391	534,547円の増収
※会計委員海外出張のため、本来は2022/23年度の支出に計上されるべき雑誌110号の制作・発送費等、合計816,574円が計上されていない。これらの支出を勘案すると、昨年度の実質的な収支は534,547-816,574=282,027円の赤字となる。			

会計監査委員の塩川伸明会員、豊川浩一会員により、ロシア史研究会の2022/2023年度の会計報告が監査され、帳簿記載は正確で、領収書なども合致しており、総じて予算が適切に執行されていることが確認されました。

2023年度大会 会員による参加記

2023年度大会の様子について、対面とオンラインで参加された4名の会員にレポートを寄稿していただきました。

【一日目】

○自由論題 A 会場・共通論題(オンライン)

中井健太

筆者にとって初めてのロシア史研究会大会はハイブリッド形式で開催された。私は福岡に赴くことができず、オンラインで参加した。私が参加記執筆の依頼をいただいたのは大会1日目

である。

A 会場での自由論題報告はベクトウルスノフ・ミルラン会員による、1920 年代のクルグズスタンにおける部族闘争についての研究である。中央アジア遊牧社会のクルグズスタンにおいては、ソヴィエトの政策上重要・必要であるはずの階級闘争が起こりえず、図らずも部族闘争が現れたことを示し、中央アジア遊牧民社会の社会主義時代研究の新たな分析視点を提示した。討論者の奥田会員からは、ロシア農村でもやはりプロレタリアートは存在せず、ソ連当局が思い描く階級闘争は起こらなかったという比較例が提示された。また、奥田会員からも評価された発表パワーポイントの構成は、今年大学院に入学したばかりの筆者には大いに参考になった。

午後の共通論題 A のテーマ「ロシア・ソ連の対外戦争と政治・外交」は、言うまでもなく現在のプーチンによるウクライナ侵攻とその後の戦争を、歴史学的に、より深く理解するためのものである。学問とは、社会に貢献してこそ存在意義があるのだと再認識しつつ、最初の報告者である黛氏の報告を聞き始めた。同報告は、18 世紀後半のロシア帝国とオスマン帝国の戦争とその後の和平交渉を、広くヨーロッパ諸国の関係を含めた視点から再検討し、ヨーロッパ国際社会の重要な一員としてのロシアが現れる過程を論じたのみならず、挟間におかれるポーランドについても言及があった。途中で回線トラブルのため中断したが、運営方の素早い対応のおかげで大きな問題はなかった。続く石野報告は、フィンランドの冬戦争の語られ方について、記憶と神話化という観点から分析したものである。戦争の記憶とナショナリズムの関係の研究は 1980 年代から盛んになったと筆者は理解しているが、今日においてもなお、ホットで意義のあるテーマである。麻田氏は、戦後ソ連の対日外交についての報告を行った。スターリンは「日本の復讐」を恐れて様々な外交を試みたが、アメリカとは一致した行動を取ることができず、結果的に冷戦の一因になったという興味深い説が提示された。討論者の池本・花田両会員のみならず、会場・オンライン参加の双方からも多くのコメントと質問が上がった。これはハイブリッド方式がうまく機能した証拠だが、運営方はご苦勞をされたと思う。最後に私ごとで恐縮だが、1日を通して、私の研究分野であるモンゴル近代史と比較しながら拝聴した。例えばソヴィエト権力が及んだ遊牧社会という点ではクルグズスタンと共通している。またフィンランドと同様、モンゴルでも 20 世紀の戦争や独立の過程の「記憶」は議論があるところだ。もちろんその一方で相違点もある。今後、幅広いロシア史研究と有機的につながるモンゴル研究ができれば、と思う。

○自由論題 B 会場、共通論題 A (対面)

藤本健太郎

1 日目午前の B 会場では、夏陽開氏が「探検に見たシベリアへの地域認識の形成：福島安正のシベリア横断を手がかりとして」のタイトルで発表した。軍人であり探検家であった福島、地理学者としての側面に着目し、彼が自らの調査研究で社会に与えた影響を、特にシベリア紹介を事例として検討する、意欲的な研究であり、コメンテーターのヤロスラブ・シュラトフ氏やフロアとの議論を経て、さらに躍進が期待される。

午後の共通論題 A は、「ロシア・ソ連の対外戦争と政治・外交」のタイトルで3名の発表者があった。パネルコーディネーターの宇山智彦会員が述べたように、特にロシアとウクライナが現実には戦争状態である現在、歴史的事例をそのまま現状と安易に類比(あるいは対比)させるこ

とは禁物であるが、事例を改めて検討し、ロシア・ソ連が経験してきた「戦争」を新たな視点で見直す、という本パネルは、現状を捉える上でも有用となるだろうし、またこのような社会情勢における歴史研究者の在り方として、勉強させられるところが大きかった。

第1報告の黛秋津氏「ロシア・オスマン戦争時におけるロシア＝西欧外交：18世紀後半を中心に」では、1768～1774年のロシア・オスマン戦争を例に取り上げ、ロシア帝国における戦争と外交の関係について明らかにした。第2報告の石野裕子氏「フィンランドにおける冬戦争の位置付け：継続戦争との比較を中心に」では、1939～1940年のフィンランドとソ連の戦争後、ある種のナショナリズム的表象によって戦争の負の側面が見えなくなっていく過程を明らかにした。第3報告の麻田雅文氏「日本の復讐を恐れて：第二次世界大戦後のソ連の対日政策の再検討」では、1945年にいわゆる「日ソ戦争」が終結した後、スターリンが日本に対して抱いていた対日恐怖が、戦後ソ連の対日政策に与えた影響を明らかにした。いずれの発表も、多くの史料を駆使した重厚な歴史研究であるのはもちろん、戦争がもたらした、講和外交・戦争の遺産・戦後外交、という3つの問題に焦点を当て、現在にも通じる人間社会共通の問題と、それに対する具体的取り組みの事例を明らかにした、という点でも、筆者は多くを学ばせていただいた。池本今日子氏と花田智之氏からは、それぞれの専門の立場からコメントがなされ、フロアからも、主には国際政治の具体的な文脈で熱心な議論が起こった。

午後にオンラインの設定で一時中断があったが、これはもちろん運営諸氏に責はなく、ハイブリッドで大規模な研究会議を運営することがいかに難しいかを示すものである。2023年の後半になって対面開催が増え、それに伴ってオンラインを廃止した学会も多い中で、少しでも多くの参加者と議論を共有すべくこれを継続しているロシア史研究会は称賛されるべきであるし、この事例がまた、今後のより良い学会運営のための礎となることを祈っている。さまざまな面で難しい大会運営にあたられた関係各氏のご尽力に心から感謝申し上げたい。

【二日目】

○A 会場自由論題・パネル、共通論題 B (対面)

伊丹聡一朗

ここでは、本年度の大会において運営に携わった方々の尽力に心からお礼を申し上げるとともに、依頼を受けた大会2日目午前のA会場及びに午後の共通論題Bについて感想を述べたい。

午前のA会場では、まず林報告「ピョートル1世時代の出版業におけるロシア正教と国家」がおこなわれた。ここでは、ピョートル1世による正教会改革において重要な役割を担ったキエフ・モギラアカデミー出身の3人の聖職者の経歴と出版物の内容について比較がなされ、同時期の聖俗両権関係が変化していく様子が示された。特にキエフ系聖職者同士の間関係と内部対立の実際に関する議論は注目に値するものであり、フロアからも多くの質疑が寄せられた。

続いて、A会場ではパネル報告「近代ロシアはいつどのように形成されたのか？」がおこなわれた。まず田中報告「北方戦争再考」では、開戦前後のロシア外交の動向に着目して、北方戦争の国際戦争としての性格が論じられた。次に池本報告「エリザヴェータ帝と正教会」では、従来同帝の信心深さと結びつけられてきた彼女の正教会重視策が、自身の政治的正統性を担

保するための政策でもあったことが論じられた。そして鳥山報告「エカテリーナ2世期の言語文化における『ロシア』」では、エカテリーナ2世自らが手掛けた2つの史劇に着目して、18世紀ロシアにおける「ロシア的なもの」への関心とヨーロッパ化の両立が論じられた。これらの報告は全て、18世紀ロシアのヨーロッパへの志向性に注目したものであり、近代ロシアの成立を考える上で貴重な前提を提供している。それ故に質疑では、ロシアにおける「近代化」と「ヨーロッパ化」の関係や、ヨーロッパ側のロシア認識について白熱した議論がおこなわれた。

午後の共通論題B「『亡命』再考」では、ソ連時代の「亡命」に関する報告がおこなわれた。まず浜報告「ユーラシア主義における『ウクライナ問題』」では、思想の「循環史」という視点に立ち、1920年代のユーラシア主義者による「東スラヴ一体性論」とウクライナ亡命者による「ウクライナ別民族論」の相克が論じられた。次に高橋報告「ウクライナ・ディアスポラ教会」では、北米におけるウクライナ系諸教会の動向を中心に、ウクライナ人ディアスポラとウクライナ民族教会の問題が論じられた。そして齋藤報告「ソ連遺伝学における知の漂流と継承」では、ルイセンコ主義に反発して海外での研究生生活を送った2人の遺伝学者の活動に着目して、ソ連由来の科学知の亡命先への継承の過程が論じられた。これら三者三様の「亡命」のあり方は、多くの亡命や難民を生んでいる昨今のウクライナ情勢を考える上でも重要なファクターとなるであろう。質疑では、亡命者たちの活動や学知がソ連国内外にどの程度還流されたのかが注目を集め、議論は活況を呈した。

以上のように本年度の大会では、ロシア内部に留まらない広い視点で論を展開する報告が多く見られ、筆者にとっても知的刺激に満ちた有意義な場となった。こうした機会を与えていただいた報告者の方々に深く感謝したい。

○B 会場自由論題、共通論題B(オンライン)

倉田有佳

昨年度に続き、対面とオンラインとのハイブリッド形式で開催され、筆者は自宅からオンラインで参加した。運営側の委員の方々は、会場とオンラインの双方に気を配らなければならず、神経を使われたと思う。出だしでは、報告者の音声割れたり、コメンテーターの当日配布資料がオンライン参加者に配布されぬ中で、声が聞き取りにくいなどの難があったのは事実だが、徐々に改善されていった。関係者のみなさんに感謝したい。

2日目午前のB会場の三名の自由論題報告と午後の共通論題Bについての印象を簡単にまとめてみたい。

三栖大明氏の自由論題報告④「『自然』誌論争に見るブレジネフ期ソ連におけるエトノス理解の焦点」は、「エトノス」の定義・理解・認識する基準などをめぐり、これほど多様な解釈や論争があったことに驚かされると同時に、興味が湧いてきた。

李暢氏の自由論題⑤「1920年代ハルビンにおける日露中庶民の重なり合う日常：濱江時報」を事例に」は、筆者の関心に近いこともあり、中国語新聞が報じるハルビン在住ロシア人の日常の点描は興味深かった。

井上岳彦氏の自由論題報告⑥「ハンボラマ・イロルトウエフと外務省：アジア巡礼旅行(1900年-1901年)をめぐって」は、インド、シヤムの現地駐在外交官の報告を基にバンデイド・ハンボラマの職にあったプリヤート人、チョインジン・イロルトウエフの巡礼旅行の意味を問うもので、仏教交流が南アジア地域との外交関係の強化に力を発揮していたことを教えられた。

共通論題 B「「亡命」再考」では、浜由樹子氏「ユーラシア主義における「ウクライナ問題」：思想の循環史の問題から」、高橋沙奈美氏「ウクライナ・ディアスポラ教会：「異端派」の時代の自己認識」、齋藤宏文氏「ソ連遺伝学における知の漂流と継承：N・V・チモフェーエフ＝レソーフスキーとT・ドブジャンスキーの事例から」、の三本の報告があった。浜報告は、中心メンバーにはウクライナにバックグラウンドを持つ者が少なくなかったというユーラシア主義のウクライナ論争（「東スラヴ一体性論」、「ウクライナ別民族論」）、そして現代のウクライナ論争と、非常に内容の濃い報告だった。「時代、空間、個人の経験を超えた思想の「循環史」というキーワードが印象的だった。

高橋報告は、1世紀以上前に北米に移住・亡命したウクライナ人社会で誕生した北米ウクライナ正教会の複雑な経緯を明らかにしたもので、世界総主教座、在外ロシア教会、本国の正教会との関係や対立構造など、多くの知見を得ることができた。

齋藤報告は、1930年代のルイセンコ派の台頭でソ連の遺伝学者が立場を脅かされた時代にアメリカとドイツで長期の研究活動を行うことを選択した2人の研究者を取り上げ、ソ連遺伝学という科学史の側面から「亡命」を再考した。時代と状況こそ異なるが、1992年から2000年代前半の約10年間、ロシア経済の混迷していた時期に起こったロシア人科学者の「海外への頭脳流出」が想起された。任期付き研究員制度を利用して来日し、大学や研究所を「避難所」とした彼らも一種の「亡命者」と言えよう。

ハルビンの亡命ロシア人問題を専門とする中嶋毅氏のコメントにフロアーからの質疑が加わり、要点がより鮮明化された。趣旨説明で半谷史郎氏が期待したとおり、ウクライナ侵攻によって「亡命」が現実味を持って語られる中で、20世紀に起こった「亡命」を思想・宗教・科学史の立場から取り上げ、改めて検討した意義は大きかった。筆者が1997年のロシア史研究会大会で「二つの大戦間の亡命ロシア人社会：在京浜ロシア人学校と在京浜亡命ロシア人社会」をテーマに発表して25年余。当時は新しいテーマだった「亡命ロシア人」、「在外ロシア」も、若手やロシア史研究会を牽引する中堅研究者によって多様な視点から分析・検討が成されていることを改めて実感させられた。

新会員の紹介

2023年10月～12月の新入会員(2名)をお知らせします。

鈴木 佑梨(2023年10月13日入会)

所属:電気通信大学非常勤講師

専攻・テーマ:18世紀ロシア政治史(外交を中心とした貴族の国家勤務)

石野 裕子(2023年12月22日入会)

所属:国士舘大学文学部史学地理学科

専攻・テーマ:フィンランド史、戦争の記憶

新委員会が発足しました

【新委員長あいさつ】

半谷史郎

互選で委員長に選ばれました。これから二年間どうぞよろしくお願いいたします。

九州大学での大会で発表された新委員の顔ぶれを見た時、最年長なのに気づいて感慨を覚えました。入会してからもう四半世紀。若手、中堅と年を重ねても、どこかまだ受け身のお客さん気分でしたのに、もう全体を率いる年回りになっていることに気づかされました。長年お世話になった会に恩返しする時が来たようです。微力ながら頑張ります。

大学をめぐる状況は厳しさを増す一方で、多くの方が目の前の仕事に追われて大変な思いをしておられることでしょう。またロシアをめぐる状況も混迷を深め、先行きがまったく見えません。こうした時だからこそ、ロシア史研究を志す仲間たちが集い議論する場を確保することは非常に重要です。大会、雑誌、例会。様々な機会を通じて会員同士が議論を深められるような環境を整備して行きたいと思っています。

【委員会の構成】(順不同)

氏名 (委員会のなかでの担当)

①所属、②専門分野、③委員としての抱負、④各担当における連絡事項

半谷史郎 (委員長)

- ① 愛知県立大学
- ② ソ連民族政策史、日ソ文化交流史

左近幸村 (事務局長)

- ① 九州大学
- ② 近代ロシアの経済史、ロシア極東の歴史
- ③ 宮崎市定が中国の官僚を評して言った「最も伝導力に富んだ電線」たるべく、善処します。
- ④ 大会での報告の申込を、お待ちしております。

鶴見太郎 (大会企画)

- ① 東京大学
- ② ロシア・ユダヤ史
- ③ 大会企画を担当することになりました。ロシア界限もロシア史研究も不安定な時期ですが、人類の歴史として改めてロシア史を探求できればと思います。
- ④ 上記の観点から共通論題に関してご提案がありましたらぜひお寄せください。

橋本伸也（大会企画）

- ① 関西学院大学
- ② 「歴史と記憶」の政治
- ③ 私立大学勤務なので退職まであと数年あるとはいえ、国公立なら停年という年齢で補充委員を依頼され、正直なところ戸惑っています。何年も続いた激務からやっとなんて解放されて隠居気分ゆえ今さら何をという思いですが、発案された方々には何か狙いがあるのでしょうか。若い委員の皆さんの足を引っ張らぬよう、依頼のあった「企画」担当に限って多少のお手伝いをさせていただきます。

神長英輔（編集長）

- ① 国学院大学
- ② ロシア極東近現代史・日露交流史
- ③ できるだけ誤字や誤記がないように努めます。
- ④ 積極的な投稿、情報の提供、査読への協力をお願いいたします。

立石洋子（会誌編集）

- ① 同志社大学
- ② ロシア・ソ連の歴史認識
- ③ 引き続き会誌の編集を担当することになりました。どうぞよろしく願いいたします。
- ④ 論文や書評などのご投稿をお待ちしております。

金山浩司（会誌編集）

- ① 九州大学
- ② ソ連期の科学技術
- ③ ふたたび『ロシア史研究』の編集にかかわらせていただくことになりました。最新の成果に予断なく公平に接することは、簡単ではないですが、目指したいと思っております。

青木恭子（会誌編集）

- ① 富山大学
- ② ロシア近代史
- ③ 足手まといにならないよう努めます。

伊賀上菜穂（会計：会員情報管理）

- ① 中央大学
- ② 東北アジアにおけるロシア系住民の形成史と現状、特に古儀式派教徒について。
- ③ 引き続き会員情報管理を担当します。新しい会員の方々の参加で会の活動が活発化していくよう、コツコツ働いておりますので、ご協力よろしく願いいたします。
- ④ 2024年度の会費請求書にはゆうちょ銀行の振替払込用紙が同封されていませんでした。用紙が必要な方は、ゆうちょ銀行に備え付けの用紙をお使いください（銀行のアプリ等で振り込む場合は用紙は不要です）。
ご所属やご住所の変更がありましたら、事務局メールアドレス経由で早めにお知らせください。

青島陽子（名簿係）

- ① 北海道大学
- ② ロシア帝国史
- ③ 滞りないよう頑張ります
- ④ 会費納入や名簿作成などご協力お願いいたします。

高橋沙奈美（会計）

- ① 九州大学
- ② 20世紀以降のロシア・ウクライナの正教会
- ③ 精一杯努力いたしますので、みなさまのお力添えをどうぞよろしくお願い申し上げます。

中地美枝（例会）

- ① 北星学園大学
- ② ソ連史
- ③ 会員の方が参加したくなる様な例会の企画に努めたいと思います。
- ④ ご要望などあれば是非ご連絡下さい。

シュラトフ・ヤロスラブ（例会）

- ① 早稲田大学
- ② 日露関係、ロシア近現代史、日本近現代史
- ③ 面白い例会が開催できるよう頑張ります～
- ④ 例会のアイデアやご提案があれば、気軽にご連絡ください。

濱本真実（ニューズレター）

- ① 大阪公立大学
- ② 近世・近代の中央ユーラシア史・ロシア史
- ③ 遅れずに刊行できるように頑張ります。

林健太（ニューズレター）

- ① 北海道大学大学院文学研究科後期博士課程
- ② ピョートル一世時代の出版文化史
- ③ ニューズレターを担当いたします。微力ながら発行に尽力いたします。
- ④ 国会図書館で欠号となっているニューズレター第三号をひきつづき探しております。お持ちの方は事務局にご連絡ください。

2024年のロシア史研究会大会 報告者募集のお知らせ

2024年大会は、10月5日・6日の両日、東京大学本郷キャンパスを会場として、完全対面での開催を予定しています。新型コロナウイルスの感染再拡大など、特段の事情が生じない限りは、コロナ禍以前の形に戻るようになるので、ご注意ください。

会員の皆様から、①共通論題企画の提案と、②自由論題・パネル報告の申込を募集します。共通論題については、ご提案を受けて委員会で議論し、春頃までにタイトルと報告者を決定したいと考えております。積極的なご意見・ご希望・ご提案をお寄せくださいますよう、お願いいたします。

- ① 共通論題：提案締切 2月29日（木）
- ② 自由論題・パネル報告：申込締切 4月30日（火）

①共通論題は、特定の様式はありません。②自由論題・パネル報告については、応募用紙を本会ウェブサイト「大会」頁からダウンロードし、添付ファイルを事務局に添付でお送りください。

<応募先>

ロシア史研究会事務局(左近幸村)宛

E-mail: sakon.yukimura.112 (at) m.kyushu-u.ac.jp

※(at)の部分を@に代えて、ご利用ください。

ロシア史研ニューズレター
第132号 2024年1月29日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(濱本真実・林健太)
〒819-0395
福岡市西区元岡744
九州大学大学院経済学研究院
左近研究室気付
